



# ものづくりから始まる 新しいコミュニティ

富山県立山町 特定非営利活動法人立山クラフト舎





富山県立山町の上東地域から見える立山連峰はうっすらと雪化粧が始まり、山麓に広がる穏やかな田園や紅葉の木々と合わせて、四季の移り変わりを感じる事ができる。

雄大な立山連峰を一望できる立山町総合公園の広場で、10月23日～24日の2日間、全国からクラフト作家が集まり作品を販売する「立山Craft」が開かれた。

およそ100組のブースが出店され、陶芸・木工・ガラス・服飾・金工・革などのクラフト作家による作品が販売される。クラフト作家の出店以外にも、フードや音楽の生演奏、子どもが自由にお絵描きできるコーナーもあり、来場者は様々な体験や交流ができる。

従来は2日間で約1万5千人が来場する会場だが、現在のコロナ禍のため、来場者は富山県内在住の方に限定し、人数制限を設け1日3500人までとして、様々な感染対策を行ったの開催となった。

朝9時の開門と同時に行列ができる店もあり、来場者は好みの品を探しながら会場を巡る。北は宮城、南は高知から、各地で作られたクラフト作品を一つ一つ見ていると、作家の感性が感じられとても楽しい。

地元立山町からの出店で「yuzukinari」を夫婦で営む明和さんは、布小物やカラフルなキャンドルなど可愛い小物を並べる。「他県の作家さんから『景色いいよね』と言われるのは誇りです。これまで移住者の方が中心となって立山町を盛り上げてくれたので、今後は地元に住んできた自分も盛り上げていきたい」と話す。同じく立山町で「Feitru」を営み洋服づくりを行う佐伯さんは「立山Craftで出会う方とのつながりを大切にしています」とのこと。

また、地元の方々による地域紹介ブースとして「新瀬戸地区」「日中上野地区」、地元行政から「立山町」のブースが出店し地域の魅力を伝えている。「新瀬戸地区」のブースに立つ二人の女性は、立山の自然に惹かれ他県から移住してきた。農作業で多めにできたものをブースに出展し「作り手の想いや立山の自然の素晴らしさを伝えたい」という。

「立山Craft」は、このイベントを主催する「特定非営利活動法人立山クラフト舎」代表の佐藤みどりさんが、モノ作りをする人の多い上東地域を拠点に「この土地に沢山の人の足を運んでもらう中で、地域の魅力を知ってもらいたい」との思いから企画。2015年から毎年開催して今年で7回目となる。

佐藤さんは自然豊かな環境で子育てをしていきたい気持ちから移住先を探していたところ、上東地域の新瀬戸地区を訪れる。新瀬戸地区には430年以上の伝統を持つ越中瀬戸焼があり、江戸時代には加賀藩に献納していた歴史を持ち、現在でも4軒の窯元で作陶が続いている。しかし近年は地域の小中学校がすべてなくなり、過疎化が顕著に進んでいる状況にもあった。

もともと愛知県瀬戸市で陶芸作家として活動していた佐藤さんは、立山町役場からの声掛けもあり、地域おこし協力隊として着任し、新瀬戸地区に移住することになる。でも、陶芸だけでなく、どのように地域おこしをしたらよいのだろう。自分にできることを悩んだ末に生まれたのが、クラフトフェアの開催だった。

真剣にもづくりに取り組む作家が集まる魅力的なクラフトフェアなら、沢山の人がこの土地に足を運んでもらえるか



もしれない。こうして実行委員会を立ち上げ、地区内外から取り組みに共感するメンバーを募り企画を立てていった。

もともと、当初は「クラフトフェアって何？」というのが役場や地域の反応だったという。このような状況のなか、地域の自治振興会の会長さんにも実行委員会に入ってもらった。地域住民の方との橋渡しをしてもらったおかげで、スムーズに開催できた面もあると振り返る。

現在の自治振興会会長を務める中川泰信さんは「当初はどのような取り組みをするのか分からなかったけど、この土地に魅力を感じてくれた移住者が行う地域おこしのチャレンジを、地元としてバックアップしたい」という意識から、経費や人出の面で応援したという。

上東地域には、越中瀬戸焼をはじめ、和紙の作家、漆の作家、自然農を営む人など、一つの地域に多くの文化が生まれ、モノづくりの作家がいる。自然の移り変わる風景がきつと制作活動に良い影響を与えるのだろう。ハーブを使った施設や、世界に向けた日本酒の酒蔵、ロゼットを使った里山マウンテンバイクツアーなど、新たな取り組みも生まれてきている。

佐藤さんは、「過疎化が進むこの地域で、これだけたくさんの方が集まる場ができたのは意義があると思う。地域をいつたん離れた人も『最近のこの地域面白くなってきたね』と、再び気持ちに向く人が増えるかもしれない」と今後の動きに期待する。

立山 Craft は、地域で暮らすクラフト作家や移住者と地域住民の、お互いの信頼の基盤になっているのかもしれない。ものづくりをきっかけに新しいコミュニティが作られつつある、その現場を目の当たりにすることができたような気がした。